3ステップで幕切れを

矢鳥すだち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
３ステップで幕切れを

【Ｎコード】
Ｎ５５６８Ｕ

【作者名】
矢鳥すだち

【あらすじ】
男はエリート街道まっしぐらの青年だ。さて本日は、彼の勤める会社の創立１０周年記念パーティ。無能だらけのパーティ会場で、男は失敗続きのマジシャンを内心で嘲笑っていたが、――

先程から、マジシャンは失敗ばかりしている。
１、２、３！　と景気よく声をあげたはいいが、帽子から鳩は出てこない。かれこれ一時間は経っただろうか、それこそ手を替え品を替え披露してはいるのものの、どれ一つ成功していない。
今日は我が社の創立記念パーティーだ。ホテルのホールを一つ借りて大規模に行っている。失敗ばかりのマジシャンはパーティーの余興に呼ばれた訳だ。　まぁ、余興どころか興ざめな訳だが。
１０周年、だったっけか。自分の会社の創立年くらい覚えておけという話だが、興味がないので仕方がない。そもそも俺は会社に対してまるで愛情というものがないのだ、――なんせ、横領をしてるくらいだからな。
二年前、だったであろうか。俺は部署の金の管理を任される立場となった。当初は俺も登り詰めたなと達成感に浸っていたんだが、どうやら俺は本質的に“満足できない”人間らしい。そのうち、金をちょろまかすようになった。最初は千単位だった横領は今じゃ０が６つである。バレないのだから、それでいいのだ。
ふう、と一つため息をついて、俺はマジシャンの方を見つめる。横領にも気付かないような無能どもと話していたって手品以上に興ざめだ、だったらあのマジシャンが恥をかくのを見届ける方が、よっぽど有意義じゃないだろうか？――――性格が悪い？　よく言われる。
しかし。一つ気になることがある。
俺は確かにエリートだ、認めよう、自分で言うのが図々しいのは重々承知しているさ。だがそれは事実だ、俺は成り上がる。いずれは社長の座につくはずだ。だがしかし俺はまだ上層部とは言えない立場、本当ならば……俺はこの場に、呼ばれるはずがない。
（ま、……俺は部長に、期待されているからな）

俺の部長はお人好しだ。愛想笑いにすぐ騙される。柔和に丁重に接していたら、簡単に気に入ってくれた。阿呆だ、と思う。無能だと。そういう屑どもは、せいぜい俺に利用されるといい。どうせお気に入りの部下を部長仲間に自慢したいのだろう。　そう思い、俺はこのことを深く考えないことにした。

したのだ、が。

「さて、お次は串刺しマジックです！」

「……串刺し？」

唐突に、マジシャンが声を張りあげる。おいおい、と俺は内心突っ込んだ。こんなマジシャンが串刺しマジック？　成功する訳ないじゃないか！

俺の気持ちとは裏腹に舞台上は様変わりしていく。――妙だ、これはあまりにも、――飾り立てすらされていないただの黒い箱の横には、明らかに本物である長剣がいくつもならんで、これでは、まるで、初めから、……手品をする気などないような。

「さて、このマジックには協力者が必要です」

さっきまでとは打って変わって、マジシャンは軽妙に話す。どこか楽しげに、愉しげに……待てよ、この空気はなんだ？……何故皆、俺を、見て、……いや、待て、……待てよ、待ってくれまさか、

「――そこの貴方、」

目が、

「お願いできますか？」

合った。

声にならない悲鳴が漏れる。俺は椅子から転げ落ち、一目散に出口へと向かった。無様に扉に泣きついて力ずくで取っ手を引っ張る、案の定、びくともしない。　助けてくれ、誰か開けてくれ！　叫びながらドアを叩いたが何の反応も返ってはこない、やがてあがき続ける俺を、明るいスポットライトが照らした。

俺は扉に寄りかかり、座り込んだまま会場を見渡す。照らされているのは俺だけで皆の顔はよく見えない。けれど、……同僚の顔、

上司の顔、……どこか、嘲笑うような眼差し。
「な、……なん、だよ、」
俺は頬が引きつるのを感じた。見ている。見ている。視線を感じる。不気味なまでに静まった会場。
「なんでだよ、なん、……確かに、確かに俺は裏切ったよ、裏切ったさ、けど俺は、ちゃんと勤めてきたじゃないか……ここにいる誰よりも俺は稼いできたはずだ、……なんだよ、見るなよ、何とか言え、なぁ死ぬほどのことじゃないだろ？　確かに、横領はした、俺はこの会社を裏切った、でも死ななくたっていいだろ？　そうだろ？　なんだよ、何で黙ってんだよ、くそ、見るな、てめぇら全員無能のクセして、俺はお前らよりずっと生きてる価値があんだろ、そうだろ、見るなよ、なんで見るんだよ、死ぬんだったらてめぇらだろ、無能、役立たず、屑のクセして、何で見るんだよ、俺は、俺は、――やめてくれ、許してくれ、嫌だ、悪かった、俺が悪かったから、だから頼むよ、頼む、嫌だ、嫌だ怖い、死にたくない、」
やめてくれ、まだ死にたくない！！
なりふり構わず訴えた声は、響くだけ響いて、虚空に消える。その余韻が消え去ったあとに、マジシャンは俺に微笑みかけた。
「大丈夫。　1、2、3でおしまいです」

幕切れは、もうすぐそこだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5568u/

３ステップで幕切れを

2011年10月9日09時43分発行